The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハイデガーの学問(科学)観を巡る一考察 : 前期思想を中心に
Author(s)	土井, 理代
Citation	メタフュシカ. 2007, 38, p. 85-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ハイデガーの学問（科学）観を巡る一考察
── 前期思想を中心に

土井理代

1．学[1] の「方法」について──『ツォリコーン・ゼミナール』より

ハイデガーにとってその生涯にわたる哲学的思惟の主題は存在（在ること）そのものであったと言ってよい。だが存在そのものといっても、彼にとってそれは、私自身がそれである者、すなわち普通「人間」と呼ばれる存在者──ハイデガーが特に「現存在（Dasein）」と術語化した存在者──との関わり抜きでは決して論じることのできない事柄であった。このことは、裏返して見れば、人間という存在者については存在そのものとの関わり抜きで論じることができない、ということでもある。そして、人間は単に他の存在者に並ぶ一つの存在者にすぎないのではなく、むしろ自己自身も含めてすべての存在者がともかくも「存在する」、という事実を理解することができる、すなわち、存在そのものへと開かれているおそらく唯一の存在者である、という観点は、筆者にとってハイデガーの思惟が今なお対話に値すると思われる点でもある。

人間がどのように理解されるべきであるのか、ということについては、自然についての科学的解明がこれほどまでに進展した時代にあって、そしてまた精緻な理論に基づいた科学技術がこれほどまでに高度化した社会に実際住んでいる私たちの間ですら、いまだ十分に信頼できる知が共有されていない。もちろん、宗教的教義や芸術表現などを通しての理解、あるいは伝統的な倫理道徳、近代科学的方法による心身についての諸理論など、さまざまな手掛かりに囲まれて、各人は紛れもなく人として日々生きているのであり、それらだけですでに十分だと見る人もいるかもしれない。しかし、排他的な教義に陥ることなく、われわれ自身がそれであるものを「ありのまま」に捉えようとする態度を保持することこそ、事柄に即した、普遍的な理解の前提であると考えるなら、ハイデガーの思惟の試みは、一つの重要な手掛かりを与えてくれるはずである。なぜなら、元々はただ事柄に合わせて適切に「問う」ことだけを目標とし、その「方法」を探し求め

[1] （表題も含めて）本論稿では Wissenschaft という語を文脈に応じて学ないし学問、あるいは科学という言葉で表しているが、必ずしもそれほど厳密な使い分けをしているわけではないことをここに断っておく。

た彼の試みには、結果としておそらく彼自身にしか意味をもたないような教義化された部分も含まれているとしても、最初の動機のままの開かれた思惟の痕跡が確かに残されていると思われるからである。

では、存在という問われるべき事柄との本質的な関わりのうちにある人間を、その関わりのまま捉えること――このことは、どのようにして遂行されうるのだろうか。ハイデガーは初期から哲学の「方法」に非常にこだわったが、晩年にスイスの精神科医メダルト・ボスを中心としたサークルで行われるようになったゼミナール（1959 年～ 1969 年）の中でも、彼はそのための「方法」の重要性について再三触れている。以下この節では、「ツォリコーン・ゼミナール」と呼ばれたこの一連のゼミナールの記録から、本論稿にとって重要と思われる部分を概観しておきたい。ちなみにこのテクストを最初に引き合いに出すのは、このゼミナールが、もっぱら近代的な自然科学（医学や心理学）の訓練を受けた研究者たちを相手とするものであり、ハイデガーが多くの場合、比較的わかりやすい言葉を使って対話的に、『存在と時間』から晩年までの自身の思惟活動を総括するような視点で語っているためである。もっとも本論稿は、表題にも示したように、中期以降のハイデガーの思惟について論じるものではないが、このゼミナールの記録からは、少なくとも彼が 1927 年に『存在と時間』（前編）を出版してから、そこで提示された根本課題に、晩年に至るまで一貫して取り組み続けたこと、そしてそこには、自然科学における認識がますます支配的になる――「真理」の基準として――ことに対する、時に過剰とも思える危機意識が常に働いていたことがよくわかるので、格好の材料であるように思われる。

さて、ハイデガーはこのゼミナールで、人間もまた一種の自然物としての側面をもつ限り、自然科学が、科学に特有の方法で――すなわち「自然科学的な投企」の内部で――人間をも対象とすることができることを認めている。しかし、そのような人間理解は「人間を、人間に特有の本質へ向けて投企されたのでは全くないような方法の助けを借りて規定することを要求している」（Zollikoner Seminare, S.32）、と見なしている。では、「人間に特有の本質へ向けて投企された方法」とは、どのようなものだというのか。

そこでまず、彼による「方法」という語の語源的解釈（cf. ZS, S.132）を見ておこう。それによれば、「方法」という語の「根源的な、真正な意味」（ZS, S.144）とは、「或る事柄へ、或る事柄領域へ通じる道」、「私たちがそれを通って或る事柄を追い求める道」といった程度の素朴な意味である。そしてその意味に沿って、私たちが常にすでにそこ（関わり合い）のうちに滞留している、その「出会われてくるものとの関わり合いへと、ことさらに入り込むこと（Eigens Sich-einlassens in unser Verhältnis zu dem Begegnenden）」（ZS, S.143）という方法の「名」が、近代科学の方法とはまったく別の方法（道）を表すものとして示される。この、もっぱら中期・後期のハイデガーを思わせる表現で示されているものは、しかし、このゼミナールを通しても明らかなように、『存在と時間』期において（あるいは、すでに初期フライブルク時代から）ハイデガーにとっての哲学の方法であった「現象学」――ただし、意識という主題的領野を学的に記述するそれではなく、自らを示すもの（存在）をあるがままに受け取る、という意味での現象学――の方法そのものである。

一方、これに対して近代的な自然科学の方法の特徴とはどのようなものか。この点については、

本論稿の枠を超えることになるので、ここでは簡単に、それを表すキーワードとしてハイデガーが取り出したものを並べるにとどめるならば、それは対象化であり、しかも、事柄を合法則的に表象し、計算可能（予測可能）なものとして対象化することであり、具体的には実験や理論的構築といった手続き（cf. ZS, S.167）である。

この一連のゼミナールは、このような器械的に表象された近代科学の「方法」を身につけた者に、自分が慣れ親しんだ科学的なものの見方をひとまず捨てて、ただ素朴に思惟すること、そうしたときに示されてくる事柄をただ追いかけ保持することを学ばせようとするものであり、そこでは中期以降のハイデガーが遂行してきた存在史的な思惟とその脈絡で繰り広げられる科学批判が話題の基礎をなしている。（もっともこのゼミナールでは、存在史的思惟を特徴づける独特の用語法はあまり前面に出されないが。）『存在と時間』期にプログラムとして提示された「存在論の歴史の解体」の具体化とも言える存在史的思惟は、教義的に単純化することも可能であるような、或る意味においてはわかりやすい物語性をもつものであり、「そのような見方もできるかもしれない」という程度の真理性（蓋然性）しかないようにも見えるのだが、おそらく、このような見方の根底には、ハイデガーの視点からすれば、近代的な科学への一種の信仰が潜んでいるということになるだろう。それはすなわち、数学的に規定可能である、という対象性格を示さないものはすべて、「不確実であるとして、すなわち真理ではないとして、すなわち真に存在するのではないものとして除外」（ZS, S.138）するものである。というのも、彼の解釈に従えば、近代の学（科学）においては、人間が主観としてすべてを測定する基準となると同時に、測定可能な存在者すべてが客観となり、そのような意味で「客観性をもっている」ということと、確実である、すなわち真理であるということは同一視される、という事態が生じるからである。

このような学（科学）および理論をめぐる「現象学的省察」（ZS, S.125）は、科学全盛の時代にあって、人間の存在（実存）が属しているような事柄領域への道を開こうとするときには、どうしても必要であるとハイデガーは言う。すなわち、「近世的科学の特性への洞察を獲得し、そこで観取されたことを絶えず目の前に保持し、真正な意味で批判的に（kritisch）、すなわち区別しながら、世界の自然科学的な対象化を、自然科学的な対象化に逆らう全く別のありかたの諸現象が自らを示すこと（Sich-Zeigen）と対比して考量すること」（ZS, S.139）が必要である、と。しかしこの場合、自然科学的な対象化と、現象が自らを示すこととは、単に比較されるだけの並列的な事柄ではない。むしろ、前者は後者に基礎をもっており、しかもそのことは前者の態度においては隠されたままである、と見なされる。

このように、科学に対して哲学（現象学）をより根源的な知とする捉え方は、ハイデガーの思惟においては初期から一貫しているものである。初期（特に 1919 年の戦時緊急学期講義以降）のハイデガーもまた、根源となる体験が理論的態度において破壊され喪失されていくこと（脱生化）と、前理論的な体験を現象学的生においてありのままに獲得することを対比的に捉え（cf. GA56/57, S.85ff.）、前者に対して後者を「根源学（Urwissenschaft, Ursprungswissenschaft）」として樹立しようとした。ハイデガーの科学批判は、哲学による科学の基礎づけ、という発想と常に表裏一体である、と言えるのではないだろうか。

２． 初期から前期のハイデガーの哲学における、哲学および理論（科学）の概念

そもそも、近代以降の西欧において成立し発展を遂げた自然科学（範例的には物理学）に対して、哲学、および 19 世紀になって「精神科学」や「歴史科学」などの名のもとで成立するようになった個別科学が、いかにして学として遂行されうるか、といった問題への関心は、ハイデガーが哲学を始めた当初から、すでにその時代状況のなかで広く共有されていた。以下では、おそらく一般に考えられている以上に強くハイデガーの思惟に影響を及ぼし、その問題意識を方向づけたようにも見える 19 世紀的状況と、その中から形成されてきたと考えられる、初期から前期ハイデガーにおける学問（科学）観について述べたいと思う。

２－１．諸学を基礎づける学、という 19 世紀的問題意識

哲学による諸学(科学)の基礎づけ――そこには､科学を哲学的に基礎づけるというだけでなく、哲学が哲学自身を基礎づけるということが当然含まれるだろう。つまり、諸学（科学）において新たに獲得される認識を正当化するためには、それを正当化する当の哲学自身に、学としての確固とした基盤がなければならないはずである。しかし、カントの時代においてすでに、哲学（形而上学）は、他の諸学に対してその学問性の危うさが指摘されており、そのためにまず『純粋理性批判』が書かれなければならなかったほどである。ここに哲学の危機意識の表れを見ることもできるだろう。では、純粋理性批判とはどういう性格のものであったのか。この点からまず簡単に見ておこう。

カントは、『純粋理性批判』第二版序論において、形而上学が、論理学や数学、あるいは自然科学に比べて「学としての確実な道」（Kritik der reinen Vernunft, B VII）を歩んでいないと述べている。もっともカントによれば、論理学は悟性自身の形式のみを問題とするため、早くから「確実な道」を歩むことが比較的容易であったのに対し、本来の意味で、また客観的に学と呼ばれて然るべき学の革命的な成功例が、数学と自然科学（物理学）であった。そのため、形而上学もまた、これらの学のやり方に倣い、理性自身が自らの認識能力に応じて経験しうるもののみを認識内容とするべきである、とされた。こうして、根本学（基礎学）たる形而上学を、純粋理性の学の体系として新たに樹立する準備としてカントは､純粋理性批判という｢方法に関する論究｣(KrV, B XXII）から着手したわけである。

これは言い換えれば「純粋理性の体系への手解き」であり、したがってそれはいまだ純粋理性の「学説（Doktrin)」ではなく単なる「批判」であり、それがもたらすものは人間の理性の「拡張」ではなくむしろ「精練」である（cf. KrV, B25f.)。周知のようにカントは、対象に関わる認識ではなく、対象についての人間の認識の仕方――それがア・プリオリに可能である限りにおいて――に関わる認識を、「超越論的（transzendental)」と名づけたので、この批判はまた超越論的批判とも呼ばれた（ibid.)。こうして、カントによって超越論的哲学の伝統が打ち立てられ、批判（哲学）による哲学自身および諸科学の基礎づけが方向づけられた。しかし歴史の教えるところによれば、その後 19 世紀（とりわけその後半）に入り、ヘーゲル哲学の壮大な体系が崩壊して以降、制度化の進む自然科学とは対照的に、哲学の危機意識はますます高まる一方である。チャールズ・バムバッハによれば、そのような状況のなかで、「学（科学）の学」（理論の理論）と

しての哲学を新たに立て直すためのさまざまな試みが行なわれたが、にもかかわらず、ハイデガーが『存在と時間』を出版する 1927 年までには、ドイツの大学に所属するほとんどの哲学者たちは、自分たちの学科に迫り来る「危機」に直面していた（cf. Heidegger, Dilthey, and the Crisis of Historicism, p.22）。その試みには、例えば新カント学派の哲学者たち（ヴィンデルバントやリッカートら）の理論があるが、彼らをはじめとしてこの時代においては、「主観と客観、あるいは精神と自然という二つの領域によって分断された知のための批判的理論を展開すること」（ibid, p.21）が広く求められていた。

この辺の事情については、ハイデガーの講義録（特に初期フライブルク時代からマールブルク時代）でも頻繁に取り上げられているが、ここで少し、当時ハイデガーに師事していたガダマーがこの時代について述べていることに触れておく。

ガダマーは、ミルやヘルムホルツを引き合いに出しながら、自然科学に遅れて 19 世紀にようやく形成され始めた精神科学が有する固有の論理（固有の認識の理想、方法の概念など）を明らかにする試みについて、それがなかなか軌道に乗らなかった様子を描いている（cf. Wahrheit und Methode, S.9f.）。それは一言で言えば、この頃にはすでに、自然科学の方法論（論理学）を、学そのものの方法論（論理学）と同一視する考え方があまりにも支配的であったためである。しかしそれでも、精神科学を自立した学として基礎づけようとする積極的な試みが諦められたわけではない。それは、成功したと言えるかどうかはともかく、歴史学の分野におけるドロイゼンや、哲学におけるディルタイ、あるいは新カント学派などを通じて、さまざまな形で着手された。そして、これらの哲学的基礎づけの新たな試みにおいて、先例として彼らに重要な手掛かりを与えたのがカントだった。ガダマーによれば、「認識（理）論」（Erkenntnistheorie）という語は 19 世紀に初めて登場したが、「19 世紀が認識理論の世紀となったのは、ヘーゲル哲学の崩壊とともに、ロゴスと存在の自明的な対応が決定的に壊れたからである」（WuM, S.224）。かつて、自然を数学的構築によって認識する新しい学（自然科学）が 17 世紀に登場して以降、自然認識の正当化への要求が生まれたが、この問題に決着をつけたのが、カントによる純粋理性批判の仕事であった。したがって、ヘーゲル哲学の崩壊後、例えば歴史学派（ドロイゼンら）は、カントがかつて自然認識のために行なった批判を、歴史的な認識の基礎づけにも要求したのであり、ディルタイや新カント学派においても同様に、人間精神は歴史をどのように認識すべきなのか、歴史的な経験はいかにして学（科学）になることができるのか、といった批判哲学的な問題設定が共有されるようになったのである（cf. WuM, S.224f.）。

以上のような背景のもとで、19 世紀においてはカントの批判哲学は広く認識理論として受容され、諸学の基礎づけの方法論のための手掛かりとして応用された。そして初期ハイデガーもまた、「学としての哲学」の系譜をめぐる哲学史的な叙述の中で、カントの「認識理論はそれ自身学であるだけでなく、理論のための学的理論でもあることを要求する」（GA56/57, S.19）と述べ、カントが学的哲学へ向かったのと類似の転換が、19 世紀後半に興った新カント学派において見られる、としている。（もっとも、ハイデガーは後に『カントと形而上学の問題』（1929）において、「純粋理性批判は『認識理論』とは何の関係もない」（KPM, S.17）と端的に述べ、独自のカント解釈

を展開するのであるが。）

周知のように、ハイデガーは新カント学派（西南ドイツ学派）の重鎮リッカートの下で研究を始め、その後まもなく、フッサールによって創始され当時勢力を拡大しつつあった現象学へと転向した。もちろん現象学に対しても、それが意識という領野を主題とする点でハイデガーは早くから距離を置いているが、新カント学派の哲学に関しては、特にその理論的態度の前提という点で、当初から批判的であった。そして初期ハイデガーが現象学に求めたものは、まさしく、前理論的な、ありのままの生そのもの――根源――へ接近するための方法としての可能性であったのである。

２－２．ハイデガーにおける根源学の要求――基礎的存在論へ

いわゆる初期フライブルク時代から、『存在と時間』前編の公刊とその後数年の模索期までを、ハイデガーによる一つの仕事の仕上げ（根源学から基礎的存在論へ）の時期として大きく捉えるならば、確かに主題とされる事柄の点で、生から存在そのものへ――もっとも、存在そのものが問いの本来の主題とされたとはいえ、差し当たっての主題は、問う者自身である現存在に定められた――という変遷（いわば思惟の存在論化）が認められるが、そこに一貫して見られるのは、あるべき哲学の方法に対するハイデガーの強い関心である。その関心は、しばしば方法論そのものが議論の主題とされるほど強いものである。なぜ彼はそれほどまでに方法にこだわったのだろうか。それは、少なくともハイデガーにとって、哲学にはまだ確立された方法というものがなかったからである、と言ってよいだろう。もちろん哲学にふさわしい方法が皆無であったわけではない。現象学こそが哲学の方法として彼の思惟にとっての導きの糸となったのであるが、ハイデガーにとってはその現象学の理念そのものが問題であったのもまた確かである（cf. GA58, S.1f.）。

この点に関して、まず、『存在と時間』の周囲世界分析の端緒になったとも考えられる 1919 年講義（戦時緊急学期講義）――もっとも、周囲世界分析および「事実性の解釈学」について述べられるようになったのは 1919/20 冬学期講義以来であると注釈されているが（cf. Sein und Zeit, S.72）――を見てみよう。すでに「現象学」を標榜（cf. GA56/57, S.98）しているこの講義は、「根源学としての哲学の理念」を主題としているが、「根源学」という理念は、ここからしばらく初期ハイデガーの哲学（現象学）にとってのキーワードとなるものであり、それはやがて『存在と時間』期の基礎的存在論（Fundamentalontologie）の理念へと結実していくと言ってよいものである。

さて、この講義録からわかるのは、ハイデガーにとって哲学が根源学であるべきなのははっきりしているものの、どうすればその学が実現されるのか、その具体的な道を開くのはなかなか容易ではない、ということである。根源学はあくまで理念であり、その対象領域さえ明確に規定されているとは言えないのである。したがって「根源学」の内実が十分明らかにされないうちに、まずその理念の循環性が指摘される。ハイデガーによれば、そもそも学の方法とは、学の対象の本質から生まれるべきものであるが（cf. GA56/57, S.181）、その一方で、真正な哲学的方法のための真正な手がかりが獲得されれば、「その方法が、新しい問題領域をいわば創造的に露呈させ明るみに出す」（GA56/57, S.16）とも言われるように、適切な方法の獲得は新たな問題領域の発

見に通じる、という側面もある。だとすれば、結局学の方法と対象は循環的であり、とりわけ根源学の方法は、それが真に根源学である限り、他の派生的な学（科学）から導出されることができないために、一層それ自身において循環的とならざるをえないだろう。ハイデガーはすでにこの講義を通してこのような哲学の循環性を積極的に受け入れようとしている。

こうして、この講義では方法をめぐって議論が紆余曲折するのであるが、「或るものが存在するのか？」という問いの体験、および、講義室で学生がいつものように座る自分の席を見る、あるいは自分が学生たちに向かって話をする講壇を教師が見る、という、前理論的な「周囲世界体験（Umwelterlebnis）」（GA56/57, S.70ff.）が持ち出される後半から、ようやく根源学の内実が朧げに像を結び始める。特に周囲世界体験は、ハイデガーが求める根源学にとっての重要な手掛かりとなっているように見えるが、ただ、この講義ではまだ、その体験領域をどのように学的に開示していくべきなのか、その積極的な方法概念はあまり明らかになっていない。とりわけ不分明なのは、次の点についてである。それはすなわち、認識理論をはじめとする理論的態度のもとでは、周囲世界体験のような、生の本質に根ざした根源的な――いわばはじめから一定の歴史的意味を帯びて与えられてくるような――体－験（Er-leben）が、さまざまなカテゴリーや感覚へと破壊されて脱－生（Ent- leben）となる、とされ、そのような理論化（対象化）が批判されているように見える一方で、そのような体験変様の諸段階も含め、前理論的な体験を破壊しないでありのままに捉える（理解する）、という根源学の方法においても一種の理論化（対象化）が起こっていないかどうか、起こっているとすればそれは前者の理論化とどう違うのか、といった記述の方法をめぐる問題である[2]。では、このような問題について、また学（理論）と哲学の関係について、『存在と時間』の基礎的存在論ではどのようになっているだろうか。

ところで、前期ハイデガーの哲学的思惟は、自身を特徴づける名として、その根本的な方法を表す「現象学」という名のほかに、根源学、解釈学、存在論、基礎的存在論、形而上学（過渡的に）など、時期に応じて複数の名を名乗っており、その点からも自身の哲学（現象学）の具体的なあり方をめぐる試行錯誤が見て取れるのだが、少なくとも 1920 年代までは、それ自身学的な哲学であろうとしたことは確かである。そして学的な哲学であることには、上にも見たように、他のあらゆる学を――もちろん自身をも――を基礎づける、という機能が含まれており、まさにハイデガーにとって哲学とはそのような学でなければならなかったのである。しかし、カントの批判に倣い、19 世紀的な科学全盛の状況の中ですでにさまざまな哲学的基礎づけが試みられつつあったにもかかわらず、ハイデガーの目に映ったのは、哲学には相変わらずそれ自身を基礎づけうるような方法や学の理念がないということ、そしてそれどころか、学の理想のようになっていた自然科学（物理学）をはじめ、今や諸学が――「確実な道」を歩むどころか――危機に陥ってい

[2] この問題についてハイデガーは、一般化とは異なる形式化（フッサールの『論理学研究』で示されている区別）という考え方を手掛かりに、存在（実存）に関する記述を「形式的に予示する（formalanzeigend）」記述と性格づけ、対象化（一般化）との区別を図るようになる。そしてこの「形式的予示」という方法概念は、前期ハイデガーの哲学にとって重要なキーワードの一つであることは確かであるのだが、十分明確に規定されているようには思われない。

る、ということである（cf. GA20, S.3f.; SuZ, S.9f.）。

したがって、今や自然科学と精神科学のそれぞれの対象領域として、自然と精神という二つの存在者の領域（カテゴリー）に分断されてしまっている対象世界を、まずそれらすべての存在者に先立つ存在そのもの――それはもはやそれ自身存在者ではなく、いかなる領域概念でもない――の概念を問うところから根本的に統一し直す必要があったのであり、しかもそのための基礎は、存在を理解することを本質とする人間（現存在）に求められなければならなかったのである。初期ハイデガーの思惟の基礎的存在論への深化には、このような背景があったと言ってよいだろう。そしてまた、この『存在と時間』期には、ハイデガーの哲学はカントの「超越論的批判」と類比的に、単に存在者（対象）に関わる存在者的認識ではなく、その存在者的認識のあり方に関わる存在論的認識を扱うものとして、「超越論的」という性格をも得るようになる。もちろんこの時期のハイデガーにとってカントの批判哲学は、それが新カント学派にとって「認識理論」（理論の理論）としての哲学のモデルであったのとは違って、むしろ有限な人間的現存在の一種の存在論として、基礎的存在論の先駆となるものであった。

では、上でも触れたように、このように一見すると極めて学的な体裁をとるに至った基礎的存在論には「理論化」の危険はないのだろうか。そもそも基礎的存在論の学的性格とはどのようなものであり、基礎的存在論は学（科学）に対してどのような位置にあるのだろうか。最後にこの点について触れておきたいと思う。

２－３．基礎的存在論と学

『存在と時間』では、存在の問い（の遂行）のための手掛かりとして、まず現存在の分析論が展開された。ハイデガーが基礎的存在論と呼んでいるのは、この現存在の分析論のことである。この現存在という語は、存在理解を本質とする人間という存在者の特性を表す概念であり、したがってハイデガーにとって現存在の分析論は、人間という存在者（対象）についての領域的存在論や人間学と同じものではありえなかった。というのも、現存在として理解された人間は、もはや他の存在者に並ぶ存在者ではないからである。世界－内－存在という概念（実存カテゴリー）でハイデガーが言い表そうとしているのは、あらかじめ世界と対峙した私が他の存在者と並んで世界の中にいる、というカプセル的な表象とは違い、むしろ、現存在が現においてそのつど世界を開示（投企）しながら――いわば一定の仕方で投企するように仕向けられながら――その開示される世界のほうから出会われてくる存在者と関わり合っている、という独特の超越論的構造である。したがって、結局現存在において、そこにおいてのみ、そのつどすべての存在者の存在が――差し当たり学的にではなく――開示されるのであり、学的な態度において特定の存在者にことさらに関わることは、現において一定の仕方で出会われている存在者へと態度をとることにほかならない。そしてこのような見方からは、いかなる学もその基礎づけのためには現存在という基礎に立ち還る以外にない、という帰結につながるだろう。

ところで、ちょうど 1919 年の戦時緊急学期でもすでに、理論的な態度が周囲世界体験において出会われるものを変様（脱－生）させる、ということが大筋において示されていたが、基礎的存在論においてもまた、現存在の態度に応じて存在者の存在様態が変様する、と見なされる。

それはすなわち、事物が手許にあるもの（das Zuhandene）から眼前にあるもの（das Vorhandene）へと変様することである。そしてこの決定的な変様をもたらすものは、現存在自身の在りようの変様、つまり「差し当たり大抵」とも性格づけられる身近な日常における事物との配慮的な関わり（Besorgen）から、理論的態度への転換（Umschlag）なのであるが（SuZ, S.357ff.）、その両極の間にはいわば中間的な諸段階が見て取られている。また理論的態度をとる現存在においても、身近な事物との配慮的な関わり（例えば実験道具の使用や筆記用具の使用など）のあることが指摘されるように、たとえ「学的な態度」であってもそれは「世界－内－存在のあり方として、単なる『純粋に精神的な活動』ではない」（SuZ, S.358）。ハイデガーが目指しているのは、学を「真である命題の基礎づけ連関の全体」（SuZ, S.11）、「真である、すなわち妥当する命題の基礎づけ連関」（SuZ, S.357）として捉える学の「論理学的」概念ではなく、「学の実存論的概念」なのである。

しかし、このように学的態度（ないし理論的態度）をそのようなものとして捉えることは、それ自身どのような態度であるといえるのだろうか。つまり、現存在の実存論的分析論として展開される基礎的存在論も確かに学的性格をもつのであるが、その基礎的存在論において、このように学（理論）が現存在のあり方とされ、それに応じて現存在が主題的に関わる対象のほうもまた、最も身近なあり方からの変様を被る、と解釈されるとき、基礎的存在論が主題的に関わっている当の現存在自身についてはどうなっているのだろうか。この点に関して、『存在と時間』期のハイデガーの現象学には、（少なくともハイデガー自身にとって）もはや曖昧さはないと言ってよい。自らを示すもの（自ずと示されるもの）を、それ自身のほうから自らを示す通りに、それ自身のほうから見えさせる（cf. SuZ, S.34）と定式化される、初期からもすでにハイデガーの哲学的思惟の導きの糸となっていた「現象学」の方法は、存在論――準備的には基礎的存在論――の方法として、ここでは現存在の存在をそれ自身のほうから見えるようにするために用いられており、それは学ないし理論における主題化（客観化）と同じではない。基礎的存在論は、存在理解を本質とする人間の実存を解釈して明示化していく道程であるが、これはすなわち、存在をめがけて存在者をそのつど越え行く（その中で存在者に関わることができる）という超越の動性を本質とする現存在にとって、すべての存在者との関わりの根底にあるこの現象――したがって、学における事物の客観化も、超越を前提としている（cf. SuZ, S.363）――をただ明示的に反復していくことであるからである。

いわば、現存在の超越（世界－内－存在）の現象には、その「外部」に、実はそれを制約しているようなさらなる基礎があるわけではない。したがって、学の実存論的な基礎づけが試みられるのと類比的に、実存論的分析論のさらなる基礎づけが求められることはできない、と言ってよい。ただ、比喩を交えて言えば、現存在の側には解消されない存在そのものの側があることによって、現存在という基礎には本質的に「穴」が空いており、それゆえこの基礎づけの遂行（としての哲学的生）には、終わりのない反復（循環）が要求されることになるだろう。

文献

Martin Heidegger, *Sein und Zeit*（SuZ）, Max Niemeyer, 1986[16].

——, *Zollikoner Seminare*（ZS）, Vittorio Klostermann, 1987.

——, *Gesamtausgabe*（GA）, Vittorio Klostermann.（引用の際には略号の後に巻数と頁数を並記）

Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*（KrV）, Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft, 1974.

Charles R. Bambach, *Heidegger, Dilthey, and the Crisis of Historicism*, Cornell University Press, 1995.

Hans-Georg Gadamer, *Wahrheit und Methode*（WuM）, J.C.B.Mohr, 1990[6].

（どいりよ　大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学）

Eine Betrachtung zur Auffassung der Wissenschaft beim frühen Heidegger

Riyo DOI

Die vorliegende Abhandlung behandelt Heideggers Auffassung der Wissenschaft und ihrer Methode, besonders in seinem frühen Denken.

Wie Heidegger in seinen letzteren Jahren in den Seminaren mit den Naturwissenschaftlern spricht, heiβt die Methode der Weg, auf dem wir einer Sache nachgehen, also ist die methodische Haltung von entscheidender Bedeutung, um die Sache sachgemäβ zu untersuchen. Schon betont der junge Heidegger dieses Methodenproblem, und für ihn ist Phänomenologie die Methode der Philosophie als Ursprungswissenschaft. Er versucht die sich selbst begründende Idee der Ursprungswissenschaft zu gewinnen, die die vortheoretische Erlebnissphäre vom Umwelterlebnis erschlieβen kann, weil es im Wesen des Lebens an und für sich liegt aber in der theoretischen Verhaltung verloren ist, und das ist eben im phänomenologischen Leben zugänglich.

Diese Idee entwickelt sich zu die der Fundamentalontologie, d. h. Analytik des menschlichen Daseins, die die fundamentale Frage nach dem Sein als Sein vorbereitet. In der fundamentalontologischen Analytik des Daseins ist auch nach der ontologischen Genesis der theoretisch-wissenschaftlichen Verhaltung gesucht, und man kann hier das transzendental- philosophische Problem, vor das Heidegger in seiner ontologischen Fragestellung von neuem uns stellt.

「キーワード」
方法、科学批判、基礎づけ、根源学、現象学